Labrīt new me ~~ 新しい自分に出会えたか?

田口 和也

7月の事前研修で出会った青年たちは、生き生きとしていて、活動にも積極的に取り組んでいた。

表題の「Labrīt new me」は、団員が議論を重ねて作った団の目標である。これは、ラトビア訪問を通じて、団員一人ひとりが、昨日までの自分と違う新しい自分になろう、という望みを込めたものであった。

一方で、足元は大丈夫か、という印象があったことも 事実だった。実際、その後の準備期間(自主研修)で も、準備の遅れやバラつきのため、副団長からかなり 指導せざるを得なかった。

それでも、9月8日に成田空港を出発する時には、団パーカーの製作も含め、一通りの準備も整い、みんなが元気で期待を胸に飛行機に乗り込んだ。

1.ラトビアとはどんな国か

ここで、ラトビアとはどのような国か、国の状況や歴 史について述べてみるのも有益だと思う。

ここでは、団員が予め調べたものを基に、私も訪問中にラトビアの人に話を伺ったり、資料をいただいたりしているので、それらによって記述する。

人口減少、少子化に悩む

ラトビアの人口は211万人(2018年1月現在)。これは、長野県・岐阜県と同じくらいである。面積は6.5万km で、北海道より一回り小さい。

EU加盟後、若年層を中心に人口の国外流出が続き、人口減少と少子化に悩んでいる。

平坦な国土、欧州一の滝とは

ラトビアは、最も標高の高い地点でも海抜312mで、 東寄りの一部地域を除き、平坦な地勢だ。国全体が、湖 と森の国と言える。河川は3,800、湖は2,256を数える 由。森林面積は、国土の約48%を占める。

地方都市のクルディーガを訪問した際、町のすぐそばにある欧州一の「ヴェンタの滝」に案内された。何が欧州一かというと、滝の幅が一番広い (250m) ということ

で、高さは約2m。

国とは言葉

Labrītはラトビア語で「おはよう」の意味だ。「こんにちは」はLabdien、「今晩は」はLabvakarとなる。

ラトビア語はバルト語に属し、インド・ヨーロッパ語族ではあるが、フランス・スペインなどのラテン語、ドイツ・スウェーデンなどのゲルマン語はもちろん、ロシア・東欧などのスラブ語とも系統が異なる。

さらに、フィンランドのフィン語は、インド・ヨーロッパ 語族ではなく、ウラル語族に属する。

このように、周辺諸国とは、言語上隔たりがある。

バルト三国では、北隣のエストニア語はフィン語と同じグループ。一方、南隣のリトアニア語とは同じバルト語ながら、お互いにあまり通じない、とのこと。言葉が通じないことが、バルト三国とは言いながら、それぞれが独立している理由と思われる。

民族構成と言語

(注:この節に限り、「○○人」とは国籍ではなく、民族の意)

ラトビアの民族構成は、ラトビア人が61%、ロシア人が26%となっている(ロシア系で数十万人にのぼる「非国籍者」の問題もある)。他に、旧ソ連のベラルーシ人、ウクライナ人が合わせて6%である。

このため、ロシア語を話す人は30%を超え、また、都市部でその割合が高いため(首都のリガで約40%など)、職業上の必要性や、旧ソ連時代にはロシア語が必修だったことなどから、ロシア語の存在感は大きい。今でも、ラトビア人の約70%がロシア語を話せると言う。

1991年のラトビア独立後は、公用語はラトビア語に限り(2012年にロシア語を公用語に追加するかどうかで国民投票が行われたが、約75%の反対多数で否決)、学校教育の場でもラトビア語を優先する政策をとっている。

現在、ラトビアでは英語教育に熱心で、小学校入学 前から始めている。このため、若年層を中心に英語を 流暢に話せる者が増えている。 なお、ラトビアでは、母語+一つの言語を話せる者は95%、母語+二つの言語を話せる者は54%となっている。

苦難の歴史(近代以前)

ラトビアの地には、紀元前から自然信仰のラトビア人が住んでいた。13世紀初めごろからドイツ騎士団による侵攻が始まった。これはローマ教皇が呼びかけた「北方十字軍」の一環で、1201年には司教に率いられた一団がリガに拠点を構えた。リガは、1282年にハンザ同盟に加盟し、欧州とロシアを結ぶ貿易拠点として繁栄した。

その後、周辺諸国の盛衰に伴い、時にはポーランド・リトアニア連合、時にはスウェーデンの支配下に置かれたが、18世紀末のポーランド分割により、ラトビアの全域も帝政ロシアの領域に入った。なお、日露戦争の時には、ロシアのバルチック艦隊が、西部の港町リエパーヤ(今回の訪問地の一つ)から日本に向けて出航している。

国旗にまつわる伝説

ラトビアの国旗は、上下が赤(やや茶色に近い濃い 赤色)で真ん中に白のラインが入るデザインだ。

その昔、降伏を拒否して戦い続けた将軍が、傷つき 倒れて白い旗の上に横たえられると、彼の体から流れ 出た血が、旗の両側を赤く染め、体の真下の部分だけ が白く残ったと云う。

「それはいつごろの出来事ですか」と尋ねる私に、 ラトビア青年は「いつという事ではなく、これはあくま で伝説です」と語った。

苦難の歴史(近現代)

第一次世界大戦後の1918年、ラトビアは念願の独立を達成する。ちなみに、今年は独立100周年の節目の年に当たる。日本とは、1928年に友好関係が始まり、リガに公使館が置かれた。

しかし、ラトビアの苦難の歴史は続く。

第二次世界大戦が始まると、初めはソ連、次いでナチスドイツ、最後にまたソ連の侵略を受け、国土を占領された。圧倒的な軍事力を有するソ連やドイツに対して、貧弱な装備で立ち向かったものの、撃退することは到底できず、恐怖の支配を受けたのだ。戦後は、そのままソ連を構成する一共和国とされた。この時期には、大勢のラトビア人がシベリアに送られた。

「占領博物館」では、苦難の歴史を記憶に留めるべ

く、この時期の資料を展示してある。

また、「KGBビルディング」、リエパーヤで個人的に 訪れた「軍港刑務所」は、実際に使われた施設が保存 されている。

旧ソ連時代には、反ソ連と疑われただけで、過酷な 取調べや不当な拘禁が行われ、そのために使われた 暗くて狭い非衛生的な施設・設備は、陰惨そのもので あった。他国に支配された国の国民がいかに悲惨な 目に遭うかを示している。

人間の鎖、再独立そしてEUの一員に

1980年代後半から、バルト三国で独立の機運が高まった。そして1989年、三国から200万人が参加して人々が手と手をつなぎ、600km以上にも及ぶ「人間の鎖」を形作った。この非暴力の抵抗運動である「バルトの道」こそが、ソ連崩壊の最初の兆しとなった。

わずか3年後の1991年、バルト三国は旧ソ連から再び独立、国際社会に悲願の復帰を果たした。

日本は、同じ年にラトビアを国家承認し、外交関係 を開設した。2007年には、天皇皇后両陛下がご訪問 されている。

ラトビアは、2004年にEUとNATOに加盟した。経済面では、2014年にユーロを導入、2016年にOECDに加盟するなど、西欧志向が強い。

とは言え、ラトビアの強みは、地理的に欧州とロシアをつなぐ地位を占めていることであり、ロシアに対しては、安全保障面では警戒しながらも、経済的な関係をおろそかにすることは出来ない。

GDPは、2008年のリーマンショックで、しばらく低迷が続いたが、緊縮財政などで克服。2017年のGDPは302億ドルで、一人当たりでは15,400ドル(ユーロ圏平均35,000ドル、日本は38,000~39,000ドル)。

安全保障面では、ラトビア軍は5,300人と少なく、現在カナダ主体のNATO軍の大隊が展開している。 NATO軍の存在自体が安心の基となっている。

キリスト教と自然信仰

ラトビアは、中世以来の歴史的な事情から、キリスト教のプロテスタント(ルター派など)、カトリック、ロシア正教の信者がそれぞれ在住している。

また、リガをはじめ、各都市や村落では多くの教会が建てられ、今でも信者が通うとともに、貴重な文化 遺産、ひいては観光資源ともなっている。

一方、キリスト教化以前の自然信仰も、ラトビアの民 族文化、習俗の中に根付いているように思われる。

2.ラトビアへの旅、プログラムの開始

9月8日の夕方に、訪問団はリガ空港に到着した。 途中、フィンランドのヘルシンキで飛行機を乗り継いだ が、シェンゲン協定により、ここで入国手続きが行われ た。リガでは、手続き関係は一切なし。大雑把な言い方 だが、EUは一つの国のようだと実感した。

空港では、コーディネーターのマイヤさん・ラサさんの出迎えがあり、宿泊先まで案内してくれた。この後も、コーディネーターの皆さん(他にディタさん、ブラダさん)がたいへん親切に対応してくれた。

プログラムは、よく考えられた内容で、また、念入りに 調整されたものであり、ロジ面では安心して、プログラ ムの中身に専念することができた。

到着の翌日は日曜日のため、公式訪問などはなく、アルベルタ通りのビルでのオリエンテーションに続いて、ラトビア青年(国際青年育成交流事業の参加者)との顔合せを兼ねた昼食会。ここでは、若い者同士さっそく打ち解けて話が弾んでいたようだ。午後は、数グループに分かれ、それぞれにラトビア青年が1、2名チューターに付いて、リガ市内を探訪した。

リガの街並み

リガは、人口約70万人の落ち着いた町で、特に旧市街は、ダウガワ川に面し、かつての堀に囲まれた0.5kmの地域で、ユネスコの世界文化遺産に登録されている。古い教会などでは、当初の建築が13世紀まで遡れるものもある。

旧市街だけでなく、アルベルタ通りには19世紀末から20世紀初めに造られたユーゲント・シュティール (アールヌーボー) 建築群もあり、他にも新市街でレトロな雰囲気の建物が、あちこちに見受けられる。

また、建物の高さも揃えられており(階数でいえば6、7階建)、中心市街地で高い建築物は昔の教会くらいで、新しい高層建築はダウガワ川の対岸や中心市街地の外側にほぼ限られているようだ。

これは、法的な規制や建築に際しての許可などで、 担保しているとのこと。

公式訪問、行事

10日の月曜日から公式行事が始まった。

とりわけ、ライモンツ・ベーヨニス大統領にお会いする機会が得られたことは、たいへん有難いことであった。その上、大統領はご多忙な中、訪問団のために約30分という長い時間を割いて、団員と親しく懇談いただいた。なお、大統領は環境保護派で、「緑と農民連合」

から国会議員となり、これまでに環境大臣と国防大臣 を歴任しておられる。

また、外務省、教育科学省では、予定の時間を大幅 に超えて熱心な説明をしてくれた。

占領博物館では、11時の開館時刻より30分早い10時 半から私たちだけが入館できて、途中までは貸し切り 状態。ガイドが一つひとつのコーナーで丁寧に説明して くれた。

このように、特別扱いとも言うべき対応をしていただいたことに、深く感謝申し上げたい。

教育科学省、リガの二つの大学、リエパーヤでの LIAAへの訪問などを通じ、ラトビアがEUの中でどのよ うに将来を切り開こうとしているかを感じた。

大国ではないだけに、高等教育の充実や情報分野、IT など将来性のある分野を重点的に伸ばそうとしていた。

団員は持ち前の積極性を発揮し、それぞれの問題意 識を基に、質問・発言を盛んに行っていた。

「積極的で、いいね」と思う半面、「失礼はないか」とハラハラする場面も。

日本国大使館

大使館には、10日午後に公式訪問し、藤井眞理子特命全権大使から多くの分野にわたる詳細なラトビア事情のご説明を頂いた。さらに、21日の昼にも大使公邸で大使主催の昼食会を開いてくださった。

藤井大使はじめ大使館の皆さまの特別なご配慮に、 いくら感謝しても足りないとの思いを抱いている。

3.伝統と未来、ラトビアの魅力

日程も、中盤からは地方訪問や施設見学、ホームス テイがメインになる。ここでは、それらを通じて感じたラ トビアの魅力について述べてみたい。

音楽、芸術

ラトビアといえば、「歌と踊りの祭典」だ。5年ごとに国を挙げて開催され、参加者も観客も数万人に達する。1873年から絶えることなく続いており、今年6月にも開かれた。

リガでのウェルカム・ディナーの時に、30~40人の青年が民族衣装を身に付けて登場、素晴らしい声を聞かせてくれた。学校教育で音楽の時間を多くとっているのかと思いきや、学校外での自主的な活動とのこと。

アルスンガの村では、Suitu sievasの女性たちが、地域の民族衣装で張りのある歌声を聞かせてくれた。

リガでは19世紀に建てられた国立オペラ座で、バレエ

『白鳥の湖』を鑑賞した。また、リエパーヤでは現代的なホールGreat Amberで、クラシックのコンサートを聴いた。いずれも観客席は、ほぼ満員。バレエ鑑賞の方は小さな子どもさんもいたし、奏者にも若手の姿があった。

Ghetto Games

もちろんラトビアでは、現代音楽、アートも盛んなの だが、今回の訪問では特に注意して見なかった。

その代わり、現代スポーツのGhetto Gamesを体験したことが貴重であった。これは、バスケット・ボールなどいくつものストリート・スポーツやパフォーマンスをまとめて、このように呼んでいるもので、この夏には世界大会も開かれた由。

体験では、ストリート・ダンスなどで汗をかいた。

4.ディスカッション

リエパーヤでの思い出深いホームステイのあと、17日の夕方、リガ近郊のバルテザーズにあるリゾート・ホテルに到着。レイク・サイドの林に囲まれた静かな場所だ。

団員たちは、18~20日の三日間、ここでラトビア青年 とのディスカッション・フォーラムに臨んだ。

フォーラムのコーディネーターは、二人のラトビア女性の方々、またラトビア参加者は13人全員が女性。団員は、これまでの疲労に加えて、これより英語でのディスカッションとあって、緊張の様子。

二日目になると、疲労がピークに来た気配が漂った。 それで、副団長がコーディネーターに話して、午後は、 林の中や湖のほとりでのトークに切り替え。アリストテレ スの逍遥学派もこんな雰囲気だったかも。

その後もディスカッションが続き、20日の夕方に結果発表。団員たちは、貴重な真剣勝負を経験したと言えよう。

5.帰国

9月25日、ラトビア訪問団は無事帰国した。

帰国後は引き続き、私たちとともに来日した10人のラトビア青年をはじめ、6か国の招聘青年が集結して、日本青年とともに、国際青年交流会議の日程が28日まで行われた。

皇太子殿下がご視察、ご懇談

ここで特筆すべきは、27日に東京で行われた各国青年のディスカッションを皇太子同妃両殿下がご視察になったことだ。皇太子殿下は、引き続きレセプションに

もご臨席され、ご挨拶、各国代表とのご懇談を行われた。ラトビア青年の一人は「プリンスに会えた」と喜んでいた。

帰国後研修

最後の日程となった帰国後研修では、団の目標のうち、自信をもってエンジョイすることは概ね達成できたが、主体的に考えること、他者への尊重・思いやりなどは課題を残した、という総括になった。

その際、副団長の発案で、1対1での振り返りを行った。お互いに、それぞれの良い所も、課題も、率直に述べあう。この取り組みで、各人が自覚していることだけでなく、あまり意識していなかったことも、見つめ直すことがある程度できたようだ。

成果発表会では、ラトビア派遣団らしく弾けていた。

6.終わりに

自分としては、いたって頼りない団長ぶりで、内心忸怩たる思いをしている。ただ、体調不良の者は若干出たけれど、全団員が全てのプログラムに参加でき、最低限の役割は果たしたと思っている。

これもひとえに、内閣府、青少年国際交流推進センター、また、現地でお世話になった日本国大使館、コーディネーターの皆さまのおかげと考えている。感謝の気持ちを申し上げたい。

それぞれの団員は、表題の目標を達成できたのだろうか。何人かの団員は、ラトビア青年とのディスカッションでたいへんな努力をしていた。ある団員は、団のまとめ、仲間の団員のケアなどで、苦労していた。団での役割に熱心に取り組む者も見受けられた。全員が、プログラムに対しては積極的に臨んでいた。

今回の訪問が有意義で、「新しい自分に出会えた」 と言えるために、これからも学びを続けてほしい。「少 にして学べば、即ち壮にして為すあり」だから。

- ○バスに乗った旅人「『ラトビアへの旅』は終わったな あ。次は、どこに行って何をしようかな」
- Nākamā Pietura ○○○」
- ○「ナカマ? 次は、○○○か。何か新しいことに 出会えそうだ。よし、行ってみよう」

Paldies!